

令和5年度 まちづくりシンポジウム 〈開催レポート〉



人が集い新たな交流が生まれる時間



令和5年度のまちづくりシンポジウムは、下仁田町で開催

群馬県官民連携まちづくりプロジェクトチームが、まちづくりの普及啓発を目的として実施する「まちづくりシンポジウム」は、令和5年度群馬県庁を飛び出してまちづくりの現場でシンポジウムを開催しました。

チームが事業に協力している下仁田町を舞台にしたシンポジウムは、「人が集い新たな交流が生まれる時間」というテーマを基に、マルシェと同時開催することで、まちで活躍しているプレイヤーとの交流が生まれることを狙ったものです。

基調講演では、HAGISOの宮崎様から、まち全体を1つの宿として見立てた「まちやど」の取組を紹介いただき、地域と観光客がただサービスを提供する・サービスを受けるという関係性だけではなく、まちの一員になるという新たな関わり方についてご紹介いただきました。

公共R不動産や株式会社nestでご活躍されている飯石様からは、公共空間は使う側の視点に立って捉え直す必要があるという話から、池袋のグリーン大通りの取組についてご紹介いただき、公共空間の活用について大事なポイントを教えていただきました。

トークセッションでは、下仁田町で活躍されている瀬間様、伊藤様にもご登壇いただき、下仁田町を事例としての公共空間の活用について意見を交わしたり、下仁田町をどういうまちにしていくと良いのかについて一緒に考えました。

第1部 基調講演

(株)HAGISO 宮崎 晃吉 様



前橋市出身

東京藝術大学大学院修士課程修了後、磯崎新（いそざき あらた）アトリエ勤務を経て2011年に独立。

2013年より自社事業として最小文化複合施設

「HAGISO」を開業し、東京・谷中（やなか）のまち全体をホテルに見立てた宿泊施設「hanare」で2018年グッドデザイン賞を受賞されました。

一般社団法人日本まちやど協会の代表理事を務め、まちをひとつの宿と見立てて宿泊施設と地域の日常を繋ぐ「まちやど」事業に取り組む。

○HAGISO発足からまちやどの取組について

住んでいた萩荘というアパートが東日本大震災を契機として、耐震面での不安からオーナーが取り壊しをすることになった。（社名はこの「萩荘」から）ただ取り壊すだけでは寂しいのでアパートのお葬式をすることとなり、当時の仲間達とやったところ、思いのほか来客があった。

それを見たオーナーが「壊すのがもったいない」と発言があったことから、事業計画を立案したところ、リノベーションして活用するのが一番利回りも良かったため、提案し了承いただいた。

そこから、萩荘をリノベーションして管理することとなった。

この萩荘で、最小文化複合施設「HAGISO」を開業した。「HAGISO」で生活し、近隣の銭湯で風呂に入り、まちの飲食店でご飯を食べてという生活を送るうちに、「まちやど」を着想。

まち全体を1つの宿に見立てて、まちにある色々な要素を組み合わせる仕組みを構築した。

HAGISOでチェックインして、銭湯で風呂に入って、まちで食事をしてといった形で、1つの宿泊施設では完結しない、まちの一員として生活に参画していくという形。

しかし、これは新しい斬新な取組ではなく、日本に昔からあった文化であり、それを取り戻す活動である。

○近年の取組と「まちやど」の良さについて

富岡市でリノベーションまちづくりを進めている中で、「富岡にもまちやどを作ろう」という流れが生まれて、二軒長屋をまちやど「蔭屋 MABUSHI-ya」（まぶしや）にリノベーションする事業にも携わっている。

「まちやど」は、まちの一員となってまちに参画するという活動であり、従来の消費者的な感覚の観光とは異なるもの。

地域やまちが、ただサービスを提供する・サービスを受けるという関係ではなく、まちの一員になれる場所を提供できるということがよいところ。



■ 感想

「まちやど」は、ただの空き家活用事業にはとどまらず、地域資源の見直しにもつながる新たなまちのあり方であると感じました。宮崎さんの事業のように、1つの拠点を点として、点から線・面という形でエリアとしてまちが活用されていくのは、現在の多くの市町村が抱えているまちづくりの課題を解決する処方箋の一つになると感じました。また、宮崎さんが下仁田町を評した「ナチュラルボーンウォーカーブルシティ」という言葉は、下仁田町の良さを端的に表した素晴らしい言葉でした。

第1部 基調講演



公共R不動産/nest 飯石 藍 様

公共空間にまつわる実践型メディア「公共R不動産」にて、公共空間活用のリサーチ&情報発信、発注のプロセスデザイン、「公共空間逆プロポーザル」など、公共空間のクリエイティブな活用に向けた様々な事業を手がける。

豊島区（としまく）の南池袋公園・グリーン大通りを中心とした社会実装プログラム「IKEBUKURO LIVING LOOP」では、社会実験をハード整備や都市政策につなげ、公共性・寛容性あふれるパブリックスペースを生み出すべく、地元企業との協業を推進している。

○飯石さんの活動について

都内には住宅地の隙間を無理やり公園にしてしまった事例がたくさんある。その公園は、禁止事項も多く誰のものでもない空間になってしまっている。

30～40年前は、開発により人口を誘導できた時代。現在は使う側の視点に立って公共空間を捉えなおす必要があると感じている。（公共空間を生き活きとした場所へ）そういった考えから、新築で新しいものを作るというわけではなく、既存のものを有効活用して活動している。

南池袋公園のリニューアルに際し、隣接しているグリーン大通りをなんとかしてほしいと話があり、現在の池袋リビンググループにつながっている。

池袋をエリアとして歩きたくなるまちにしていく活動をしている。

○公共空間活用で大事にしていること

○小さく始めて耕し続けてじわじわ広げる。

○「関わり」の余白をデザインする。

⇒まちに関わりたい人を受け止める器

○課題<楽しさを届けるデザイン

○自分のまちは自分たちで作り育む

⇒公共空間を使うのは結局わたしたち

最初に「理想の風景・暮らし」を妄想して、風景を作ってみる。（小さく試す）

始めた当初は、毎月社会実験を行い、試行錯誤を繰り返した。

7年やってみて、続けながらチューニングするイベントから日常に落とし込みをしていった。



■ 感想

様々な事例を交えながら、公共空間の活用についてわかりやすく説明していただき、聞いていた人がよくなる様子が見えました。

公共空間のあり方についても最後に触れており、①「できる」をふやす ②「やってみる」舞台をつくる ③「やってみたい」を応援する の3つの考え方と、そのためのゆるいつながりをもったコミュニティ（ソフト）と活動できるフィールドとしてのハードを作っておく必要があるという説明は、使う側の視点にたった公共空間の考え方のキーポイントであると感じました。

第2部 トークセッション



右側の男性が「まやま接骨院」を営む瀬間様

(株)HAGISO 宮崎 晃吉 様
公共R不動産/nest 飯石 藍 様
まやま接骨院 瀬間 様
Otenki食堂 伊藤 様

○瀬間さん伊藤さんの紹介

下仁田町で生まれ育った瀬間さんは、接骨院の傍ら、狩猟や乗馬も行い幅広く活動している。

また、昨年度から下仁田町で豊島区のCCCの取組を模したTTTという活動を行っている。

伊藤さんは、外から移住しており、下仁田町と出会い古民家カフェを営んでいる。過去にも数回マルシェを主催しており、今回のマルシェも企画・運営。

○これからの下仁田町について

瀬間さん、伊藤さんの両名から本日の基調講演を聞いて、まちを良くする取組をしていきたいという話をいただいた。

伊藤さんは自分が住む本宿で「まちやど」のような取組をしたいと語り、他に3・4店舗ほど機能を補完する店舗が増えたらできるのではないかと夢を語った。

宮崎さんから、家にいてまちにでてこない人たちがまちに繰り出してくればもっと賑わいが生まれてくると話し、まちにあるリソースを活用して下仁田町の良さをつくってほしいと話しがあった。

少子高齢化の中で、高齢者と子どもが一緒に空間で喜びを持ちながら活動していく空間があってもよいのではないかという示唆もあった。

飯石さんは、下仁田町は上信電鉄の終着地であることの良さや秘境感が価値になっていると感じると話があり、公共と個人の間にあるかつての縁側のようなつながりが生まれる空間が大事ではないかという話があった。つながりから生まれるやりたいことを行政やまちの重鎮の方が後押しするような形があると良いのではないかと語った。

■ 感想

瀬間さんや伊藤さんから、自分の生き立ちや考え方を踏まえながら、まちに対する思いを語っていただき、それを様々な事例を交えながらアドバイスをしたり、後押しするような発言をしてくれた宮崎さん、飯石さんという関係性は、まちづくりシンポジウムの理想的なあり方の1つではないかと感じました。

色々とお忙しい中、今回のシンポジウムにご協力いただきました四名の方にはこの場を借りて御礼申し上げます、本当にありがとうございました。

また、お忙しい中来場していただいた皆様にも感謝申し上げます。



子育てのお忙しい中登壇していただいた伊藤様



登壇者の皆様のおかげで素敵なシンポジウムになりました。ご登壇ありがとうございました。